

創刊のこゝろ

学 長 青 山 武 雄

こゝに本学における同僚諸君の苦心の手になる「長崎外国語短期大学論叢」第一巻が発刊される運びになったことは、慶びに堪えないところである。思うに敗戦後におけるこの国の経済的、社会的困窮の中で、真理の研鑽に従事すると云うことが、どの位困難であるかは説明するまでもない。加うるに本学は創立日尙浅く、施設の整備はもとより、研究資料も極めて乏しい。この二重の困難にもめげず、同僚諸君が只管真理探究の熱意に燃えて、一切の困難を克服して研究に精進され、ここにこの研究誌を発刊するに至ったことに對し、心から敬意を表したいと思ふ。もとよりここに掲載されるものは、老大家の円熟せる周到なるものではないかも知れない。寧ろ、少壮学徒の習作にすぎぬ如きものも多々あらうと思ふ。しかし読者はその疏漏と浅見を咎めることなく、暖い同情と好意をもって、研鑽の不備を是正せられ、本誌が健康に成長するよう御指導を賜ることを期待して止まない。

本学は昭和廿一年孤々の声をあげた、キリスト教主義に立つ短期大学である。商学と語学を研修することを以て、大学の任務としてゐる。その昔、故渋沢翁は「論語とソロバン」と云う名著をもつたが、本学は「聖書とソロバン」に語学を加えてトリオとしている。思うにこの地長崎は世界に開かれた日本の窓であった。徳川鎖国の時代ですら出島を通じて依然として海外との交通は絶えることがなかった。幕末我邦が英、仏、米、露の如き国々と接触するに及んで、これらの国々の語学と、語学を通じてこれらの地域の文化を学ばねばならぬことを真剣に感じたのは長崎人である。人も知

る如く、邦人による我邦最初の英和辞典とも云うべき、文化八年発刊の本木正榮著「語厄利亜興学小筌」の凡例の中に、正榮が「家学伝来の古書を披験しつるに、五十年前先人勤学の頃に写蔵せし数本を得たり。此書、和蘭の学語を集成したる書にて、一傍に和蘭語一傍に語厄利亜語と両側に細写したるものなり云々」とある。文化八年より五十年前と云えば宝暦十一年（一七一一）頃であり、すでに長崎人は英語の修得に意を留めていたことを示すもので特筆するに足ると思ふ。

たしかにこの町は、語学と商業の町である。商業と云っても、極めて視野の広い経済に関する世界大の知識を必要とする裕りのある、商業であった。同時にこの地には、キリシタンの血が流れている。この地に、長崎外国語短期大学が誕生したのも当然であったと云へよう。

今日われわれに与えられている課題は、知識と信仰、技術と精神の調和如何である。この点については、かのアウグスチヌス以来先人の苦心の跡がある。われらも同僚諸君と共に先人の苦心に学びたい。

あと四年即ち一九五九年は、我邦にプロテスタント宣教師の渡来百年記念に当る。この年に我邦英語学に忘れることのできない貢献をなしたリギンス、監督ウイリアム、ヘボン、フルベッキが来朝している。このうちヘボンを除く全部が、長崎に上陸し、最初の奉仕をこの地で行っている。この記念すべき年を目前に、この大学の生命とも云うべき研究の最初の果実である本誌が出版されることは、意義深いことであると同時に、心から慶びに堪えないところである。